

マーシャル諸島・スタディツアーに参加して —ビキニ事件から太平洋諸島地域へ関心を広げる—

小林 茂子

(中央大学非常勤講師)

はじめに

2011年9月2日から12日まで、アジアボランティアセンター（以下、AVCと略記）主催のマーシャル諸島スタディツアーに参加した。AVCは、1999年以来、現地の様々な人々との交流を中心に、毎年マーシャル諸島へのスタディツアーを企画・実施している。今回、こうしたツアーに偶然にも参加でき、現地での見学、体験を通してそこからどんなことに気がついたか。さらに日本に帰ってきて、マーシャル諸島での体験を振り返り、どのようなことを感じているのか。「日本とマーシャル諸島との関わり」という点から考えてみたい。日本とマーシャル諸島との関わりについては、歴史的には戦前期日本による「南洋群島」への支配や日米開戦による激戦地、あるいは戦後では、アメリカの水爆実験によるビキニ環礁近海での第五福竜丸の被曝など、非常に深い関係がある。しかし、日本人の太平洋諸島地域についての関心は「列島の住民の目は、絶えず西方に釘づけになり、視線は中国、西欧に注がれ」、「東側の海太平洋は、長い間ほとんど忘却の淵に追いやられた」¹といえるのではないだろうか。今回のマーシャル諸島ツアーをとおして、日本とマーシャル諸島とのつながりを改めて考え直し、いかに継続してこの地域の人々や暮らしに思いを寄せられるか。さらにそこから太平洋諸島地域についても関心を広げることができるのか。その手がかりを探りたいと思う。

1. 2011年夏のスタディツアー —プログラムの内容—

今回の旅は、コーディネーター1名と参加者12名（大学生8名、会社員2名、定年退職者1名、学校勤務者1名〔私〕）という構成である。参加者は年齢も出身地も様々で、全員がマーシャル諸島共和国へは初めての訪問である。マーシャル諸島共和国の事前知識としては、AVCから冊子（この国の政治、経済、地理・歴史などに関する基本的内容や、協力機関の紹介など）や地

図、CDなどがあらかじめ送られてきており、ある程度の情報を持って参加している。今回のツアーは首都マジュロを中心に、行き帰りの飛行時間を除くと現地では正味8日間の活動日程であった。各日の活動内容や訪問先の概略は以下のとおりである（*はマーシャル諸島にあるNGO団体名、内容については後述する）。

1日目：教会（プロテスタント系）の日曜礼拝に体験参列、スーパーマーケットでの買い物

2日目：国会議事堂見学、伝統的リーダーへの表敬訪問、ユース・トゥー・ユース・イン・ヘルス（YTYIH）*訪問、アレレ博物館見学

3日目：マジュロ環礁での環境フィールドワーク

4日目：学校訪問、マジュロ病院訪問、ワトミ（WUTMI）*訪問、エラブ（ERUB）*との夕食会

5日目：マーシャル諸島短期大学（CMI）訪問、ワム（WAM）*訪問、カヌー体験

6日目：マジュロ環礁での自然体験

7日目：CMIの学生との相互交流、活動の振り返り

8日目：教会の日曜礼拝体験参列、教会関係者との交流、夕食・お別れ会

2. マーシャル諸島の抱える問題を考える

今回の旅では、見学したり体験したりしたことが後になってそのことの意味がわかってくるという、小さな気づきの連続であった。こうした小さな「気づきの体験」は、今振り返って考えてみると、この国の抱える問題や歴史と深く関わっているように思われる。ここでの体験を環境の問題、教育の状況、非核・平和の問題から報告したい。

到着の翌日、ホテル近くのマジュロで一番大きいスーパーマーケットを訪れた。そこでは店の広い棚にずらっと多くの食料品が並べられていたが、ほとんどすべてが輸入品であった。数日後、ローラビーチという海岸を訪れたとき、まず目に入ったのが、あちこちに広がるゴミの山の光景であった。その原因の多くがああスーパーマーケットでみた輸入食料品のプラス

チックの容器類であることにほどなく気がついた。さらにそのあと訪れたゴミ処理場では、運ばれてくるゴミは分別されておらず、作業員が素手で分別している様子をみたとき、あのゴミの山を処理する能力がゴミの排出量に追いつかない現状であることを知った。担当者によると、この処理場もう限界で、廃水が海に流れ出しているという。ゴミ処理の技術にはJICA（国際協力事業団）も関わっているとの話だが、ゴミのリサイクルや管理の問題、施設建設の財源など多くの課題があることを聞かされた。その翌日マジロ病院ウエルネスセンターを訪問した。そこでは病院が勧めている低脂肪メニューのランチを食べたが、マーシャル諸島では肥満と糖尿病、高血圧患者が急増しており、マジロ病院でも死亡原因の上位に位置しているという。マーシャル諸島にもともとあった魚やココヤシ、パンノキなどを中心とした伝統的な食事から輸入食品中心に食生活が大きく変わり、それが住民の健康に深刻な影響を与えているのである。

次に訪れたのは、リタ・クリスチャンスクールという生徒数・百数十人の私立小学校であった。その学校には教師が十人ほどいたが、そのなかには外国人教師も含まれており、教科書も国が決めたものはなく、各教師がそれぞれ用意していた。教師不足と教師の質の向上は教育問題の重要課題であり、CMI（マーシャル諸島短期大学）でも、教員養成の充実や教師の再教育のプログラムに力が入れられていた²。しかし、教育において最も危惧されているのは中退率の高さであるという。初等教育（義務教育）で1割強、初等教育修了者の約7割程度が中等教育に進むが、そのうち約4割が中退しているという³。こうした教育状況がマーシャル諸島の青少年のもつ深刻な問題（失業率や自殺率の高さ、10代の妊娠の増加など）の発生要因のひとつとなっている。

ツアー二日目に島でただ一つの博物館であるアレレ博物館を訪れた。古くて小さな博物館であったが、奥の方に写真パネルが展示されていた。そのなかの一枚には、水爆実験の放射能により体が蝕まれ、瀕死の状態で横たわっている女性とそれを見守っている何人かの人びとが写し出されていた。さらに奥まったところには、ジャルート環礁に今も残るアジア太平洋戦争中に旧日本軍が使った戦車や弾薬庫の戦跡の写真が数枚あった。そこでの見学ののち、レメヨさんという水爆実験の被曝体験者の話を聞く機会があった。レメヨさんは、ロンゲラップ環礁で被曝された体験を話されたが、体調があまりよくない様子で、長い時間ではな

かった。ロンゲラップでは多くの人ががんでなくなり、レメヨさんの父親も同じ病気で亡くなったそうだ。女性には出産の異常をきたす人が目立ったという。被曝後、ロンゲラップの人たちは、クワジェリン環礁、メジャット島などに避難し、レメヨさんは現在マジロに家族とともに住んでいるとのことである。これらの話は、アレレ博物館で見た被曝の写真と重なり、この国の人々が今も被っている核被害の苦難の一端が肌をとおして伝わる思いであった。

3. 日本とマーシャル諸島とのつながりを考える

今回のツアーを振り返りそこでの体験をとおして、日本とマーシャル諸島とのつながりについて次の三点から考えてみたい。

(1) 戦前期「南洋群島」と呼ばれていたところ

このスタディツアーの様々な体験後、日本に戻ってみるとやはり気になるのは、マーシャル諸島に対する関心の低さである。太平洋諸島地域といえば、「南の島の楽園」のイメージのもとハワイ、グアムへの観光客は多いが、その他の島々はダイビングなどごく限られた目的以外、注目されることもほとんどなく、多くの日本人にとっては関心の薄いところとなっている。しかし、マーシャル諸島共和国を含む現在のマイクロネシアは、戦前期「南洋群島」と呼ばれ（キリバス共和国、ナウル共和国を除く）、1914年の軍政から1920年の委任統治により約30年間日本の統治下にあった⁴。1939年当時、「南洋群島」には7万人以上の日本人が住んでおり、ヤルート（ジャルート）支庁地区（マーシャル諸島が含まれる地域）には600人以上の日本人がいた⁵。この支庁地区には1930年代日本人学校が1校、現地児童のための公学校が4校あり日本語による教育も行なわれていた⁶。日米開戦後は、クワジェリン環礁やジャルート環礁で現地住民を巻き込んでの激しい戦闘が続いた⁷。このツアーでみたアレレ博物館での戦跡の写真や、ローラビーチの片隅に建てられていた日本政府による戦没者慰霊碑は、こうした戦前から続く日本との歴史的関係を示していたのである。

(2) 第五福竜丸被曝からビキニ事件へ

アメリカは1946年から1958年にかけて67回もの原水爆実験をビキニ、エニウエトク両環礁で繰り返した。そのうち最大規模のブラボー水爆実験（1954年3月1日）により発生した大量の放射性降下物によって、ビキニ環礁東方160kmの海上で操業していたマグロ漁船第五

福竜丸の乗組員23名全員が被曝し、半年後には久保山愛吉無線長が死亡した。この第五福竜丸の被曝は、やがて母港・焼津をはじめ漁業関係者の運動から東京都杉並区から始まった原水禁署名運動へ、さらに広島、長崎の原爆被害を中心とした原水爆禁止運動へと続いた⁸。このような世論の高まりに対して、日米政府間の交渉によりアメリカ政府が200万ドルの慰謝料（見舞金）を支払い、日本政府はすべての請求権を放棄することで、この事件の「決着」が図られた⁹。しかしその後、元乗組員らの証言を得、また医療関係者、科学者、政治学者、ジャーナリストなどにより多方面からの第五福竜丸被曝に関する研究が取りくまれ、新たな事実も判明し多くの研究成果が積み上げられてきた¹⁰。さらに第五福竜丸以外の船舶の被曝についても多数にのぼることが明らかになり、その実態の解明が進められている¹¹。

一方、マーシャル諸島現地での住民の被曝については、当時その実態については十分公開されておらず、分からないことが多く関心も薄かった。1970年代以降、80年代、90年代をへて現在に至るまで、ジャーナリスト、写真家、研究者らが現地を訪れてあるいは住みこんで住民の被曝状況を報告した。またアメリカ側の公開された新資料をも使いつつ、被害実態の真相を明らかにしている。その研究は現在もお進められている¹²。

しかしながら、教育レベルにおいてみると、こうした研究成果が十分反映されているといえないのではない。例えば中学校や高等学校の社会系教科書をもても、マーシャル諸島を含め太平洋諸島地域についての記述は少なく、第五福竜丸の被曝についても、それが原水禁運動へのひとつのきっかけとしてエピソード的に記述されているにすぎない¹³。こうしたなか今回のツアーで、短い時間ではあったがマーシャル諸島の被曝体験者とじかに接し、証言を聞くことができたことは、非核・平和という問題を一人の人間の生きざまからリアルに感じとれる貴重な機会であったといえる。

またさらに東日本大震災による原発事故後、日本では放射能に対する危険性がにわかに関心を集めているが、ビキニ事件（第五福竜丸とマーシャル諸島住民の被曝）を、日常の生活において放射能汚染が隠蔽されてきた歴史的体験であるのとらえ、この解明からフクシマに迫るべきであるとの指摘もある¹⁴。マーシャル諸島の人々とのつながりが3・11以後の状況からも浮かび上がってくるように思う。

(3)マーシャル諸島の人々の諸問題への取りくみ

日程をみてもわかるように、今ツアーではマーシャ

ル諸島にあるいくつかのNGOを訪問する機会があった。まず若者の諸問題について独立当初から音楽や演劇などの表現方法を用いて幅広い啓発活動を行っているのがユース・トゥー・ユース・イン・ヘルス（YTYIH= Youth to Youth in Health）である。私たちが訪れたときは絵画を取り入れた芸術活動を行っていた。また、ワム（WAM=WAAN AELŌÑ IN MAJEL）は伝統的なマーシャルカヌーの製造技術、航海術を若者に指導し、職業訓練、雇用創出などに取りくんでいる。私たちもマーシャルカヌーに実際のせてもらい、見事な帆の操作で海面を進むカヌーの魅力を体験した。さらには、女性のエンパワーメントをめざすワトミ（WUTMI= Woman United Together in the Marshall Islands）や、環境問題や自然保護に貢献しているMICS（マーシャル諸島保全協会、Marshall Islands Conservation Society）などの活動を知った。核実験の被害に対して取りくんでいるエラブ（ERUB = Enewetak, Rongelap, Utrik and Bikini）は4つの環礁の頭文字をつなげたグループ名であり、子や孫の健康被害に対する補償に不安を感じた被曝者たちが結成し、島内での語り部活動やアメリカ政府に対し核実験補償の継続を求めたりしている。2008年には「マーシャル諸島・未来世代のためのプロジェクト」という島で初めてのNGOネットワークミーティングが立ちあげられ、新しい動きが生まれつつある。マーシャル諸島全体ではNGOはそれほど活発ではないそうだが、訪問した団体の取りくみには、深刻な問題を抱えながらも自分たちの力で状況を改善していこうとする姿勢が感じ取れた。そして、多くのNGOの人たちの話を聞くにつれ、地球温暖化や廃棄物・ゴミ処理などの環境問題、核実験被害、非核化・平和の問題、あるいは援助依存による経済的問題などマーシャル諸島が直面している課題は、マーシャル諸島だけの問題ではなく、広く太平洋諸島地域にも共通してみられる問題であることに気づいていった。もちろん、マーシャル諸島固有の問題として追究すべきものも含まれているのであるが、日本との現在、将来にわたっての結びつきを考えていく場合、より広い視野から関係性をとらえることで問題意識も広げられ、マーシャル諸島との新たなつながりも生み出せるかもしれないと感じた¹⁵。太平洋諸島地域の人々のつながりとマーシャル諸島のNGOの動きについて、今後も注視していきたいと思う。

おわりに

10日あまりの短いツアーであったが、現地の人たちとの体験や交流から多くの大切な事実を知った。と同時に、その過程でツアー参加者相互による意見の交換や感想を述べあう機会がなんだかあった。若い世代の参加者の感想として、「被ばく問題、環境問題など私が現地で見てきたものの知識をもっと広げて、マーシャル諸島について知りたいと思う。」「実際に訪れてみて、環境、核実験、生活習慣病など、想像を遙かに超えた現状がそこにあった。私のマーシャル諸島への印象はさまざまな社会問題を抱えた島へと変わった。」「参加メンバーで話し合ったことが新鮮で、人の意見を聞いたり、自分の考えを述べるのが自分にとって、刺激的で、視野を広げる良い機会になりました。」などという言葉が聞かれた。ここからは体験をとおして自らの見方が変化した様子が伺える。

マーシャル諸島・スタディツアーによって、現場からリアルに感じとった意見や考えを今後いかに深めていくことができるのか。

日本とマーシャル諸島との関わりという点を考えた場合、やはりビキニ事件への興味・関心が大切な手がかりになるのではないか。第五福竜丸の被曝の現実を知り、そこからマーシャル諸島住民の被曝の実態へと問題関心をつなげ（あるいはこの順番は逆の場合もあるだろう）、両者をひとつの核実験被災ととらえて考えたい。最近の研究成果によりこうした認識を一層進めることができ¹⁶、これらの問題を追究するなかで、日本とマーシャル諸島の核被害の現状やその取りくみの違い、または人々の共通した思いなどがとらえられ、日本とマーシャル諸島のつながりも深められるのではないか。特にマーシャル諸島の被曝の実態からこの島の抱える様々な問題にも気づき、人々訴えや生活状況を知ることで日本との関わり方も多面的な視点から考えられるのではないか。あるいはそこから太平洋諸島地域へと関心を広げるひとつのきっかけにもなるのではないかと思う。

このようにマーシャル諸島での「体験」をビキニ事件に起点をすえて考えることにより、日本とマーシャル諸島とのつながりを過去から現代、将来へむけて歴史的な流れでとらえられ、また、「体験」から得られたマーシャル諸島が直面している問題群（核被害、非核・平和、環境、アメリカとの関係など）を広く太平洋諸島地域のもつ課題としても認識できる視野をもつことができるのではないか。つまり、ビキニ事件を起

点にすえた思考は、日本、マーシャル諸島、太平洋諸島地域へと地理的にも関心と思考を伸ばせる契機となりうると思われる。ビキニ事件は歴史的にみても現代的視点からも多くの追究すべき重要な課題が内包されている出来事であることを今回の「体験」であらためて感じた。

【注】

1. 増田義郎『太平洋－開かれた海の歴史』（集英社新書、2004）、p.231。
2. College of the Marshall Islands, *Catalog 2010-2011*, pp.55-57
3. 渡辺幸倫「マーシャル諸島共和国における教育の現代的課題」（大東文化大学環境創造学会『環境創造』Vol.1, No.8, 2005）、p.20。
4. 戦前日本の「南洋群島」統治については、マーク・R・ピーティ「日本植民地下のミクロネシア」（『岩波講座 近代日本と植民地1 植民地帝国日本』、1992）、同「ミクロネシアにおける日本の同化政策」（小林英夫他編『『帝国という幻想』－「大東亜共栄圏」の思想と現実』青木書店、1998）、同『20世紀の日本4 植民地－帝国50年の興亡』読売新聞社、1996）、加藤聖文『大日本帝国』崩壊 東アジアの1945年』（中公新書、2009）、増田前掲書などを参照。また中原聖乃・竹峰誠一郎『マーシャル諸島ハンドブック 小さな島国の文化・歴史・政治』（凱風社、2007）にもミクロネシア小史が載っている。
5. 石川友紀「人口統計よりみた旧南洋群島における日本人移民の地域的分布と職業構成」（『琉球大学法文学部人間科学科紀要』第14号、2004年9月、p.19）。「南洋群島」の日本人人口の約7割は沖縄からの移民であった。
6. 南洋群島教育会編『南洋群島教育史』（青史社、1982、復刻版、pp.611-623）。
7. マーシャル諸島での日米戦の戦闘状況については、増田前掲書や加藤聖文前掲書にも言及がある。より詳しくは軍関係については、防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 中部太平洋方面海軍作戦<2> 昭和十七年六月以降』（朝雲新聞社、1973）、住民からの戦争体験を聞き取りしたものには『*The Typhoon of War Micronesian experiences of the pacific war*』, Lin Poyer・Suzanne Falgout・Laurence Marshall Carucci, 2001, University of Hawai'i Press などがある。また元兵士の戦争体験記は私家版が多く手にいれることは難しいが、奈良県立図書情報館の「戦争体験文庫」にはマーシャル諸島での個人の戦争体験記がいくつか集められている。
8. これについては、丸浜江里子『原水禁署名運動の誕生 東京・杉並の住民パワーと水脈』（凱風社、2011）を参照。
9. 一方、アメリカは日本人の反核運動を押さえるため「原子

- 力の平和利用」を大々的に宣伝した。その詳しい経緯については、田中利幸、ピーター・カズニック『原発とヒロシマ』(岩波ブックレット、2011)、山崎正勝『日本の核開発 1939～1955』(績文堂、2011)などを参照。また、加藤一夫『やいづ平和学入門ービキニ事件と第五福竜丸』(論創社、2012)の「参考文献」(p.168)にも関連資料があげられている。
10. 第五福竜丸に関する研究蓄積は非常に厚く、参考資料は膨大である。そのなかで基本的文献としては、ビキニ水爆実験被災五〇周年記念として出された『写真でたどる 第五福竜丸』(編集・発行:財団法人 第五福竜丸平和協会、2004)があげられる。そのなかにある「ビキニ事件と第五福竜丸に関する参考文献」(p.100)は有益な案内である。最近の資料を網羅、整理したものとして、市田真理「ビキニ事件半世紀 2003年ー2007年の報道、出版、研究について」(『立命館平和研究』第9号、2008)があげられる。また、焼津という地域から第五福竜丸の被曝を考えた資料が含まれている加藤一夫前掲書の文献紹介(pp.40-44)も参考になる。
 11. これに関しては、幡多高校生ゼミナール／高知県ビキニ水爆実験被災調査団編『ビキニの海は忘れないー核実験被災船を追う高校生たち』(平和文化、1988)、高知県ビキニ水爆実験被災調査団編『もうひとつのビキニ事件 1000隻をこえる被災船を追う』(平和文化、2004)、山下正寿『核の海の証言 ビキニ事件は終わらない』(新日本出版社、2012)を参照。また、愛媛県の南海放送が制作した、ビキニ核実験の被曝漁船員らの証言を集めた番組が映画化され、ドキュメンタリー映画「放射線を浴びた【X年後】」として2012年9月公開された。
 12. 写真家のものとして、島田興生『還らざる楽園 ビキニ被曝40年 核に触まれて』(小学館、1994)、森住卓『楽園に降った死の灰<マーシャル諸島共和国>』(新日本出版社、2009)、豊崎博光『マーシャル諸島 核の世紀 1914-2004』上・下(日本図書センター、2005)などがあげられる。ジャーナリスト・研究者のものとしては、前田哲男『非核太平洋 被爆太平洋 新編 棄民の群島』(筑摩書房、1991)、同監修、編著・グローバルヒバクシャ研究会『隠されたヒバクシャ 検証=裁きなきビキニ水爆被災』(凱風社、2005)、竹峰誠一郎『視えない核被害 マーシャル諸島核実験被害の実態を踏まえて』(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科、博士論文、2012)、中原・竹峰前掲書などが参考になる。また、当時の被曝者の証言を集めたものとして、ジェーン・ディブリン、沢田・松村訳『太陽がふたつ出た日 マーシャル諸島民の体験』(紀伊國屋書店、1993)、リジョン・エクネラング「ロンゲラップの苦しみを繰り返さないで」(ケイト・デュース&ゾール・デ・イシュター編、岩崎・大庭・石堂訳『非核と先住民族の独立をめざして』(現代人文社、2001)などがある。また、先住民族と核開発問題を考えた論考が含まれている、上村英明『先住民族の「近代化」 植民地主義を超えるために』(平凡社、2001)なども参考になる(注10の第五福竜丸平和協会・前掲写真集や市田前掲論文も参照)。
 13. しかし、教育実践は行なわれている。例えば、「第五福竜丸展示館」(東京都江東区)の展示、語り部活動を利用して同館を訪れる学校はみられる。また、教育実践記録としては、飯塚利弘『私たちの平和教育 「第五福竜丸」 「3・11」を教える』(民衆社、1977)、『知っておきたいフィリピンと太平洋の国々』(青木書店、1995)の「授業実践」(pp.213-222)、『歴史地理教育』(歴史教育者協議会)の「特集・太平洋の人々と日本・世界」(550号、1996)や「特集・第五福竜丸被災五〇年」(666号、2004)などがある。
 14. 加藤一夫前掲書(pp.156-159)。ほかに3・11以後、ビキニ事件との関連で論じたものとして、小沢節子『第五福竜丸から「3.11」後へ 被曝者大石又七の旅路』(岩波ブックレット、2011)、加藤一夫・秋山博子監修『ヒロシマ・ナガサキ・ビキニをつなぐ 焼津流平和の作り方II』(社会評論社、2012)などがある。
 15. この点に関しては、小林泉『ミクロネシアの小さな国々』(中公新書、1982)、印東道子編著『ミクロネシアを知るための58章』(赤石書店、2005)、松島泰勝『ミクロネシア 小さな島々の自立への挑戦』(早稲田大学出版部、2007)、前田朗『軍隊のない国家』(日本評論社、2008)、また論文をまとめたものとして、佐藤幸男編『世界史のなかの太平洋』(国際書院、1998)、同編『太平洋アイデンティティ』(国際書院、2003)などが示唆的である。
 16. 例えば、注10、12の文献資料や加藤一夫前掲書、中原・竹峰前掲書を参照。あるいは、安齋育郎・竹峰誠一郎『ヒバクの島マーシャルの証言 いま、ビキニ水爆被災から学ぶ』(かもがわブックレット、2004)、川崎昭一郎『第五福竜丸ビキニ事件を現代に問う』(岩波ブックレット、2004)なども手ごろだが参考になる。
- ※追記:AVCは2012年11月、解散した。

